

質問

がんの早期発見・早期治療には検診が大切と思い、毎年受けています。しかし先日、インターネットに「がん検診は、治療が必要ないものまで発見し、不必要な検査や治療をしてしまう『過剰診断』の可能性もある」という記事がありました。がん検診は、良いことばかりではないということなのでしょうか。

検診は過剰診断？



坂口 暁
徳島大大学院呼吸器・膠原病内科学分野助教

回答

わが国において「がん」は死亡原因の第1位であり、2013年の人口動態統計では全死亡者の約3・5人に1人が、がんで亡くなっていることが示されています。がん死亡者は年間36万人を超え、今後もさらに増加していくと予想されているため、その対策は喫緊の課題となっています。がん死亡の危険性を少しでも減らすためにさまざまな施策がなされていますが、その中でも▽禁煙などによるがん予防(二次予防)▽がん検診などによる早期発見(二次予防)▽適切な治療による早期治療(三次予防)といった予防策が極めて重要であると考えられます。

がん検診は1983年

治療必要ない病変も発見



がんと同じような検査や治療が行われるため、将来的に進行がんにならない病変、すなわち治療を必要としない病変をも治療してしまう可能性があるので。

具体的な例を挙げると、前立腺がんの検診では、診断に有用なPSA(前立腺特異抗原)が発見されてから、多くの前がん病変が発見されています。また、胸部コンピュータ断層撮影装置(CT)の普及により、

の老人保健法施行に伴って開始されましたが、99年からは一般財源化され、現在は各自治体(市区町村)が主体となって継続的に実施されています。検診によってがんが治療可能な段階で早期発見され、死亡率の低下が実証されていますが、検診受診者全員に利益があるわけではなく、いくつかの問題点もあります。

具体的には、発見された病変を全て手術や薬物などで治療してきましたが、その後の研究の進展によって長期間放置しても生命を脅かすことはなく、治療も必要としない病変があることが分かっています。このような病変に対する治療は、患者さんにとっては「過剰治療」になりますが、この病変が安全なのかを診断

時点で判断することは極めて困難です。がん検診で発見された病変のうち、治療の必要ないものが多く存在するというところに不安を感じる方も多いと思います。しかし、発見された病変のうち、例えば80%が過剰診断となり、過剰に治療を受けることになるにしても、残りの20%は確実に診断することができ、結果として確実にがんを治療することができず。また、がんがもしれない病変がなくなり、安心感を得ることができません。

大切なことは、早期がんや前がん病変などが発見されたとき、医師が患者さんに過剰診断かもしれない可能性を正しく認識してもらった上で、納得した治療を受けてもらえるように努めることではないかと考えます。必要に応じて、主治医の先生と十分相談していただきたいと思います。

(第4土曜掲載)

今回の質問にあるような「過剰診断」も、その一つです。過剰診断とは、検診などによって生命を脅かさない早期がんや前がん病変などが発見されることをいいます。早期がんや前がん病変の中には、発見された時点で進行がんになるかどうか判断できないものがあります。しかし、このような場合でも通常の進行

当時は、発見された病変を全て手術や薬物などで治療してきましたが、その後の研究の進展によって長期間放置しても生命を脅かすことはなく、治療も必要としない病変があることが分かっています。このような病変に対する治療は、患者さんにとっては「過剰治療」になりますが、この病変が安全なのかを診断

がんに関する質問は徳島がん対策センター(電話088(634)6442、(平日午前8時半から午後5時まで)にお寄せください。詳しくはセンターのホームページ <<http://www.tokuganraisaku.jp>>を

安全性判断極めて困難